日本景観学会誌、Vol.22, No.1,日本景観学会、2022-5

◆基調論文

「鉄道のある風景」と景観概念について

"Landscape with railway" and KEIKAN concept

明治大学 名誉教授 、鉄道総合技術研究所 会長

向殿政男

Professor Emeritus Meiji University, Chairman Railway Technical Research Institute Masao MUKAIDONO

1．まえがき

「景観」という概念については、既に、日本景観学会においてこれまで十分に検討されて来ていると思われるが、ここで筆者なりに改めて考えてみたい。筆者の職務の関係上、「鉄道のある風景」という写真を通して、風景、景色、景観の三者の関係について考察する。そして、景観に関するする考え方を試案（私案）として提出し、日本景観学会を中心にしてこの日本由来と思われる「景観」という概念を、皆で検討することを通して、更に明確化していくことを提案する。

2．鉄道のある風景

「鉄道のある風景」というキーワードでネットを検索してみると、多くの写真や動画が出てくる。特に、鉄道・運輸機構では、鉄道の日実行委員会との共催で、国土交通省の後援を得て、毎年、「鉄道のある風景写真コンテスト」を実施している[1]。また、CS チャネルで放送されていた「鉄道のある風景」というシリーズの動画をユーチューブで見ることができる[2]。「線路のある風景」というのもある[3]。

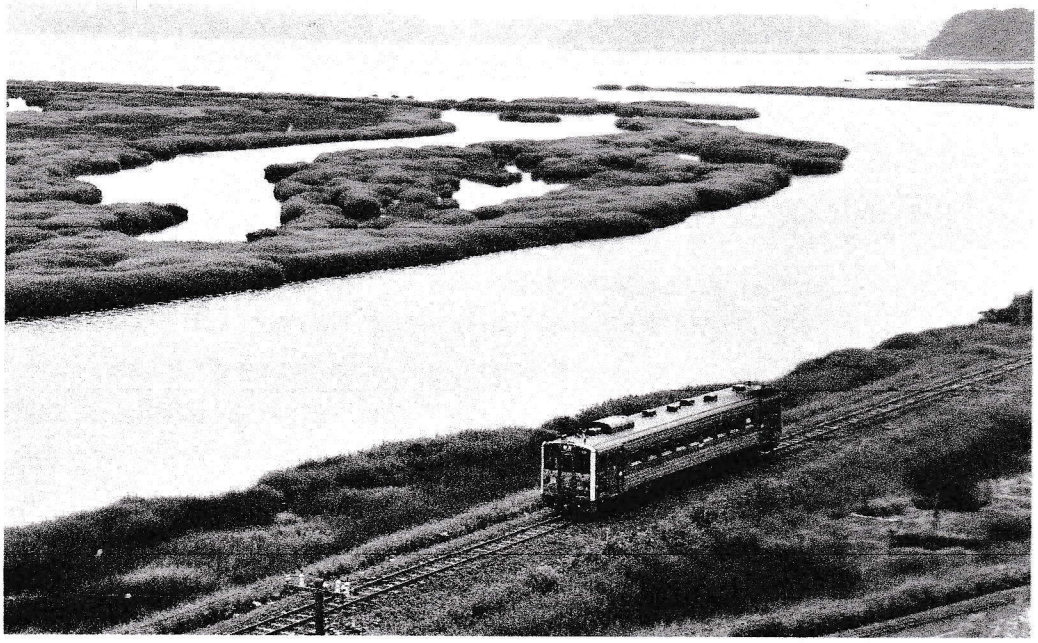


図１ 「鉄道のある風景」の例
―JR 北海道　花咲線、厚岸・糸魚沢間の景色―

図１は、JR北海道からご提供いただいた写真で、今回の学会誌の表紙を飾ったものである。この図を風景ではなく、「鉄道のある景色」と言っても問題はないと思われるが、これを今回の課題である景観という言葉を使って、風景でもなく、景色でもなく、「鉄道のある景観」といった時、違和感があるのだろうか。この写真は、鉄道のある風景なのだろうか、景色なのだろか、それとも景観なのだろうか。

風景、景色、景観の三者の違いを「鉄道のある風景」を例にして、考えてみたいと思う。そして、その議論を通して、「景観」という概念の明確化を試みることにする。

３．「景観」再考

「風景、景色、景観」をグーグルで英訳してみると「landscape, landscape, landscape」と出てくる。逆に、「landscape」を和訳してみると、「風景」と出てくる。英語には、「風景、景色、景観」の区別は、ないのだろうか。それとも、この違いは日本独自の感覚なのだろうか。この三つ以外にも、景のつく関係する言葉には、情景、絶景、景勝などもある。特に、ボキャブラリーとして存在するか否かという観点からすると、「景観」という概念は、日本独特なのではないだろうか。丁度、安心が日本独特の概念のように。

風景、景色、景観の三つに共通している漢字は「景」という字である。「景」という漢字の意味しているところは、手元にある大漢語林[4]によれば、“高い丘（京）での高まる日ざし（高い丘に日が昇る様子）”とある。ここには自然のみしか存在しない。「景」という字に風、色、観がついて人間と関係して来る。風景、景色、景観の三者の意味を、これも手元にある広辞苑[5]で引いてみると、

「風景」・・・けしき、風光、その場の情景、風姿、風采

「景色」・・・山水などのおもむき、ながめ、風景

「景観」・・・自然と人間界のことが入り混じっている現実のさま、その美しさ、

とある。風景にはけしきが、景色には風景が説明として出てくる。全体的には、美しさを求めるおもむきがある。特に、景観には美しさが出てくる。しかし、最近の景観は、必ずしも美しくない場合もある。この三つは、自然界と人間界とが関係していることに重要性がある。

一方、与えられた今回の主題のテーマである「美しい景観」における「美しい」という言葉は、人間の価値観に関係している。ただし、「景観」は人間界と関係しているとはいえ、「美しい」という言葉とは独立した概念と考えたい。

ここで、改めて風、色、観について、再度、「大漢語林」[4]を引いてみると、

「風」・・・おもむき、ありさま、風情、けしき、風景

「色」・・・感じられるようす

「観」・・・みる、よく見る、注意してみる、広く見る（例、観察）、しめす、見せる（例、観艦式）、ありさま（例、壮観）、見方（例：主観、人生観）

となっている（カッコ内の例は、筆者が補足している）。これら三つの漢字には、すべて人間の感覚、感情、価値観が関与している。主観も関係してくる。ただし、「美しい景観」などにおける美しとか、醜いとかというのは、主観的な言葉ではあるが、どちらかというと主観の多数決的な面があり、しいて言えば、客観的な主観と言えよう。これに対して、「好きな景観」などにおける好きとか、嫌いなとかいう言葉は、どちらかというと純粋な個人的な主観と言えよう。

景観においては、見られる対象と見る人間との関係、すなわち「景」（対象：客体）と「観」（主体）との区別を明確にしておく必要がある。客体と主体の間に、主体側の価値観が、感情、思想、思い出、等として関与している。「景」（客体）は、科学的事実として、科学的に解明可能かもしれないが、「観」（主体）は、主観的事実として、時として社会的事実としての解明することは一般に困難であろう。人、社会、文化、国、時代等によって異なるからである。すなわち、「美しい景観」か否かは、人、国等により、異なるであろう

例えば、「鉄道のある風景」を「鉄道のある景観」とか考えることができるとしても、この景観から引き起こされる感情は、鉄道に乗ったことのない子供が見る喜び、乗ったことがある人の郷愁、廃止されることに対する寂しさ、等々、色々なものがあり得る。例えば、軍艦島の景観をどう見るかは、人により異なるだろう。美しさだけではないはずだ。

4.「景観」概念に関する試案

ここで、風景、景色、景観の三者の関係を、試案（私案）として、提案してみたい。まず、風、色、観では、人間の関与する強さに順序があると考えよう。その強さを弱、中、強の三ランクに分けてみよう。「風」は、人間の関与が強い場合も、中くらいの場合も、また弱い場合もあり得るが、特に弱い場合が多いと考えられる。「色」は、人間の関与の弱い場合は存在しなく、中の場合が多いと考えられる。観は、人間の関与が強い場合だけと考えられる。この関係を、人間の関与の強さで順序づければ、

風（**弱**、中、強）≦色（**中**、強）≦観（**強**）

となり、人間の関与する広さの包含関係で順序づければ、

風（弱、中、強）⊇色（中、強）⊇観（強）

となるのではないだろうか。

一方、風景、景色、景観の間には、スケールの大きさに順序があり、

風景（小、中、大）⊇景色（中、大）⊇景観（大）

なのではないだろうか。

従って、概念の広さとしては、

風景⊇景色⊇景観

となり、風景が最も一般的で、景色が中間で、景観が最も強く特定された概念なのだと言えないだろうか。

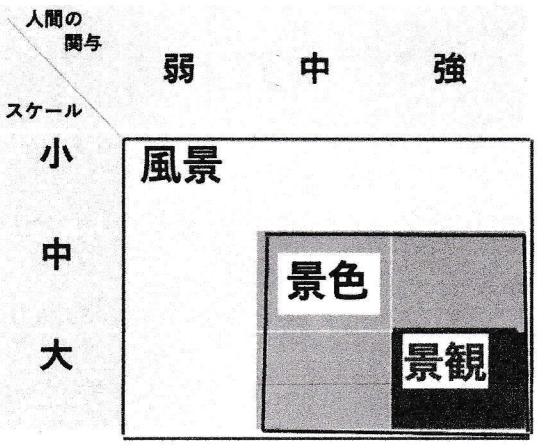


図2　風景、景色、景観の包含関係

以上の考察に基づき、風景、景色、景観の包含関係を図示すると、図２のような関係になる。この考え方に従い、今後は、風景と書いたとき、一般的に景色も景観も含んで用いることにする。

ただし、以上は、あくまでも著者の主観であり、試案（私案）である。少しは、納得して頂けるところがあることを期待したい。

次に、景観を構成する要件について考えてみよう。要件として、例えば、以下のような候補が挙げられよう。

・スケールが、大きいこと（小さなもの、微細なものは景観と呼ばない）

・自然界と人間界とが共存していること

・両者が調和して共存していること

・人間に対してある種の感情・見方・考え方（観）を呼び起こす可能性がること

・　・・・・

この件については、今後の検討を通して、皆で究明していかなければならない課題である。

ここで、「鉄道のある風景」は景観といえるかどうかを考えてみよう。多くの「鉄道のある風景」は、

・スケールが大きい

・自然が存在する・・海、空、陸

・人工物が存在する・・鉄道（表面上に人間は見えなくても想定はできる）

・自然と人工物の両者が一体となり、調和している

・見る人に感情を引き起こす（美しい風景、壮大な自然、惜しい風景、時代の流れ、社会の価値観等々）

を満たしている。これらが満たされている場合には、「鉄道のある景観」といって良いのではないだろうかと考える。

５．景観概念を明確化に向けて

例えば、ここでは、景観概念に対する一つの提案を試みてみよう。

（１）「景観」は、自然と人間との営みが含まれるものを対象にしよう。

・自然を含んだ人間の営みが見える環境を言おう。

・人工物と自然が含まれる風景を言おう（鉄道はこれかもしれない）。

（２）人間だけの風景（通勤風景、難民キャンプ風景）は、景観からはずそう

（３）自然のみの風景を景観と呼びたいときは、特に、自然景観と呼ぼう

上記は一つの提案であるが、これまでに景観の概念は、統一され、明確化されているのであろうか。確かに、曖昧のままの方が創造性を引き出し、オープンイノベーションを促すのに良い、時代によって変わるから将来のために制限しておかない方が良い等の意見があり得る。しかし、日本本景観学会として、大枠の定義、構成要因の抽出等の議論をさらに深めて議論しておくことが望ましいはずである。日本独自の概念と思われる「景観」（KEIKAN）概念を世界に通用するものとして、わが国から発信していくためには、避けて通れない道である。世界的な文化の向上に貢献するための我が国の責任でもあるような気がする。

今回、「鉄道のある風景」を通して景観を考えてみた。今後、各人が景観であると考える写真や絵画を提出し、皆で議論し合うことを通して、景観概念を更に明確化していくことを提案したい。

６．あとがき

日本景観学会で考える「景観」の概念には、観る人に感情や感慨を起こさせるだけでなく、そこからある種の意味を見出させるという考え方を含んでいて欲しいと考えている。例えば、自然（自然の摂理）と人工物（人間の営み）との調和からの価値観の創発がある風景、自然との共生と社会の新しい価値（安全、健康、well-being）の発見できる風景、過去の歴史を反省し未来社会の方向を見出す風景、などのように。そのためには、その風景を提出する人、そしてそれを観る人の両方に、必ずしも一致する必要はないが、例えば、共生の思想・などのような哲学や思想が、

その背景に必要なように思われる。なお、図１の「鉄道のある風景」に関して、日本景観学会のある理事から、「JR北海道において一両で懸命に走る姿が、今の日本景観学会にふさわしい感じがする。いずれは、特急や新幹線に接続（繋がる）まで、懸命に走る姿に共感する。」という感想があった。この点から、図１は、「鉄道のある景観」といってもよいのではないだろうか。

［付記］

本稿は、景観の概念につて、漢語辞典[4]と辞書[5]のみを参照して、筆者の常識の範囲内で考察して、とりあえず纏めてみたものである。先人の業績については一切参照していない。この意味からは、本学会の論文としては不完全なものであることは承知しているが、情報や安全を専門としている一研究者から見ると、景観とはこのように見えるということ、そしてこれをきっかけに学会の多くの人が参加して議論をして欲しいという点からは、多少の意味があるのではないだろうか。

なお、2021 年 11 月 16 日に開催された日本景観学会 2021 年度シンポジウム・研究発表会において、基調講演として筆者が本稿の内容を紹介したところ、尾島俊雄元会長から藤沢和元会長が景観について考察をされていたと記憶しているとの発言を頂いた。調べてみたら、藤沢元会長は、景観学への道」において「景観とは何か」、その中で「景観の定義」について、更に、KEIKAN[8]において「景観とは」、「景観哲学とは」について考察をされていることが分かった。本稿では、筆者の不勉強でその内容に触れることができなかったが、今後、藤沢先生の考察に導かれて更に景観概念について探求して行きたいと考えている。

この 2021 年度シンポジウム・研究発表会を体の不自由な中、ネットで観ておられた藤澤元会長から、丁寧なお手紙と共に、貴重な資料が送られてきた。オギュウスタン・ベルグの日本の風土性[9]、及び同じく、オギュウスタン・ベルグの風景の賞（謝霊運の原理）[10]である。地理学者であり、風土の研究者であるオギュウスタン・ベルク氏の意見には、気づかされるところが多々あり、大変参考になった。例えば、東洋は景観の発祥地であること、歴史的にはまず環境があって、年代の順に、山水⇒風景⇒景観、と発展してきたこと、謝霊運の原理として、環境をきれいな風景としてとらえることのできる能力を持った人が必要なこと、等々である。都市景観については、（第１の原理）私たちはスケールを再考しなければならない、（第２の原理）利益を規制すること等は、大変に参考になった。最も驚いたことは、当然かもしれないが、“景観は、客体（環境）と主体（人間）と価値観（美しい等の情や感じる力）の三者が絡んだ概念である”という私の提案と一致していることである。少なくとも、景観は、文化、歴史の中で考察しなければ解明されないことが良く理解できた。

これまでの景観の研究は、主に都市景観から行われてきたと思われるが、景観の対象は、都市だけではない。もっと基本的で抽象的な概念としての景観概念を明確にして、そこから都市を考える、そして、具体的な都市景観から景観概念を明らかにしてくという両者間の情報交流が大事なのではなかろうか。

◆参考文献

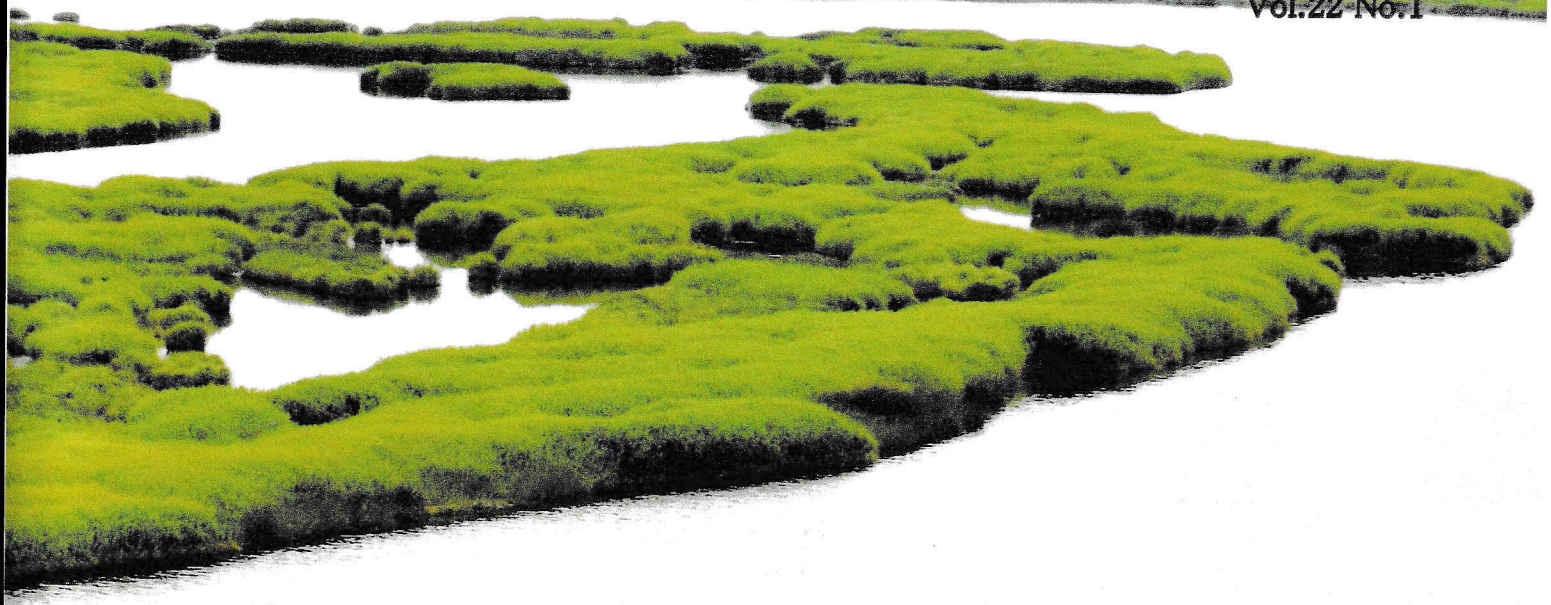
(1) 鉄道運輸機構：鉄道のある風景写真コンテスト　https://www.jrtt.go.jp/corporate/public_relations/photo_contest/
(2) 鉄道のある風景、CS チャネル、1998-10
(3) 立花幻夏：線路のある風景：鉄道写真展「昭和４０年代の断想」
(4) 米山寅太郎、鎌田正：大漢語林、大修館書店、平成４年４月
(5) 新村出編：広辞苑、岩波書店、1991-11
(6) 黒川紀章：新共生の思想、徳間書店、1996-2
(7) 藤沢和編著：景観学への道、日本経済評論社、2009-11
(8) 藤澤和編著：KEIKAN ー景観は人類存亡のバロメーター、景観問題研究所、2015-11
(9) オギュスタン・ベルク：日本の風土性、藤澤和編著：KEIKAN 景観学 - 景観は人類滅亡のバロメーター、p.26, 景観問題研究所、2015-11
(10) オギュスタン・ベルク：風景の賞（謝霊運の原理）について、KEIKAN, Vol.8, No.1, pp.34-38, 日本景観学会、2007-3

Journal of the Japanese Society of Landscape Designs
ISSN 1354-6172

KEIKAN 22

日本景観学会誌

March 2022
Vol.22 No.1



2021年度大会　よい景観をつくるために